



山岸巳代蔵と福里ニワ
後方で二人は手を結んでいる。二人で一人の意味
で撮った。写真ぎらいの山岸には珍しいスナップ。

人生本来一場の戯れ

1

以前山岸巳代蔵を取材して歩いてのことであるが、関係者のことばで二つのことが印象に残った。一つは大方は女性であるが「山岸さんはやさしい人でした」という。やさしいところもあるというのではなく、やさしい、やさしいのである。山岸はやさしさの権化みたいな人であった。

他は多くの男性の発言であるが、「変った人やったなあ」という。実に変っていて「まあ、植物の突然変異みたいな人だったなあ」という人がいた。思想の方面はともかく、人間山岸はいわば奇人の部類に属する。ただし本人自身は奇人意識はなかったろうが、他人の眼にはそうみえるのである。やさしくて、変りものの山岸巳代蔵、この人間的印象は山岸を語るものとしてほぼ順当なイメージであると思う。だが恐らく読者において順当でないとは推測されるのは、その度合いにおいてである。山岸におけるやさしさと変人振りの度合いは、まったく聞いてみなければわからない体のものである。

私自身、山岸巳代蔵に手をつけた今なお、時に関係者の口から洩れる当人の回想に驚かされっ
放してある。

いわば山岸には、病的なまでの徹底癖というものがあつた。そのところで変人とも奇人ともみえたのである。

ある徳島出身の一青年が笑いながら話してくれたことであるが、山岸は稲と話をしていたという。「俺んとこの方へ山岸さんが来た時のことだけど、朝早う起きて、たんぼの水口みづぐちに坐つて稲と話しとつたちう。通りすがりの村のものがみつくて、ありや氣狂いじゃなからうかといつた……」

この話を聞いた時には、笑うより先に意味不明のままにシヨックに近い感銘を受けた。その後別の人から「篤農家は稲とも話をする」ということを聞かされて、やはりそういう例もあるものかと思つたのであるが、山岸の場合のこの謎解きめいた話を理解するためには、やがてもう少し順を追つて考える必要があることがわかつてきた。

まず初発点として、山岸には「多情」があつたと思つてもらいたい。山岸はある時「多情者」であるという風評を聞いてこう答えている。

「私を多情者だという風評もきいています。多情という言葉をどの意味で使つておられるか、私には分りませんが、私の解釈による多情という言葉は、たしかに私に当てはまると思う。Aの人も好きBの人も好き、甲の人ももっと好き、乙の人はもっと好き、或る人は猛烈に好き、あの人は絶対好き、この人は奇蹟的に好き、だんだん文字が足りなくなつてくる。

その人その人にみんな情がかかる。情の多い人間ではある。女に限らず、私に對してなんだかんだと悪罵悪評を浴びせる男には、ひとしお不憫の情がかかる。可愛さがつもの。とり入りたい程の親しさを覚える。これ偽りのない本心である。醜女しうにょと思われれる人に対しては、特に早く幸せになつてもらいたいと祈る氣持になる」(「恋愛と結婚について」)

かくて「私の朝は情感に明け、夜は情感に暮れ、夜中も日中も情感多事、何と因果な生れつきである」としている。そして情感とは、山岸にとつて平和と仲良しと異音同義であり、徹頭徹尾この世に仲良しを訴えた。「まず仲良くであり、次には本当に仲良くである」と。友人同士仲良く、日本人同士仲良く、つまるところ人間同士仲良くしなければいけない。その突然の死に際しても、山岸は周囲の者に、「みんな好きや、仲よういこうな」といい遣して逝つた。

この情感即仲良しは、ひとり人間にとどまらない。動物にまで拡張延長される。山岸は「人鶏一体」を説いた人であるが、どんな動物でも可愛がつた。憐んだ。

晩年の妻となつた福里ニワの話によると、彼女は豪胆ともいえる性格の持ち主にも拘らず蛇が大嫌いで、蛇をみると途端におそ氣をふるうといつたところ、山岸は「蛇だつて何もあんなに嫌われるために、この世に生れてきたわけではあるまい。蛇が嫌いならなおさら寄つていって好きになりなさい」といわれたという。

ある人が極端な場合を想定して、「それならば黴菌とでも仲良しですか」と聞くと、山岸は即座に、「そう、黴菌とでも仲良しや、その方が病氣が早う治る」と答えた。

すべての動物を憐み、可愛がつたというより、山岸には動物と一種の感応関係があつたようである。いろんな動物が彼を親のごとく慕つてきた。誰にでも吠えたてる仔犬が山岸には全然吠えなかつたり、飼主以外の誰が与えても絶対餌を食べようとしない番犬が、山岸が与えると喜んで食べたりした。

某日、山岸の家を訪れた人が、座敷に上がつてきたいたちに餌をやっている山岸をみたという。野のいたちなどというものは、まずまず人家に闖入してくることはないのである。そのいたちを山岸は

手なずけていた。似た話に、普通鶏小舎へ入って鶏を捕えようとすれば逃げるはずのものが、山岸ならば、目指した鶏が自分の方から捕えられに寄ってきた、という話もあるくらいである。

それほど山岸と動物とは情愛を交し、仲良くしていたのである。その延長するところで、さらに植物とも親しくなってもおかしくはなからうことになる。まして稲は五穀の親、存分に情愛をこめ、仲良しにならねばならない。山岸が四国の片田舎の水口で、稲と会話を交していたのもそういう背景があつたことであつた。

山岸からすれば、「可愛うてならん飼犬ならば、相手が口もきけもしないのに語りかけてやるものが、同じ口のきけない、可愛うてならん稲に話しかけて何でおかしいか」ということになるのであろう。

かく山岸巳代蔵は人間と動物、植物と区別をつけなかった。動物、植物に対するに、人間のごとくである。いわば対象への感情移入、同化力が強くて、自己を容易に動物、植物に転化できる。自分というものはあるにはあるが、絶えず対象に溶解していつて自己はたちまち雲状になってしまふのである。したがって自他の区別はあつて、ない。自他一体、超個の個を生きんとしていたのが山岸巳代蔵の生きた世界であつた。

何と不可思議にして、珍しい個性ではないか。

これほどの異色の人物は、単に人間史的にみても興味深い事実といえよう。人間は時代を経るに反比例してその魅力を失いつつあるが、「解放」という名の戦後の一時期には、まだこのような異色の人物を生むに足る地盤はあつたのである。しかも真にユニークなのは、人間のみならず、その思索においてである。むしろ思索において人間がユニークであり得た。

なるほどマスコミ的には、殆ど山岸の名は知られていない。まして思想家という範疇においておや。だが山岸は、たとえ紙誌における「戦後思想家××集」などといった特集に入らずとも、まぎれもない思想家に違ひなかつた。ことに、その思索の透徹さ、実践性、具体性において第一級の人である。生活の隅々にまで自己を通したみごとさにおいて、他の如何なる思想家も及ぶものではないと思われる。

このやさしくて変りものの山岸巳代蔵、少年時の知られる限りでの僅かな材料によつてみて、その原型プロトタイプははつきり顕われている。

山岸巳代蔵は一九〇一年（明治三十四）八月十二日、滋賀県蒲生郡老蘇村大字東老蘇、有名な「老蘇の森」のすぐ近くで生れた。父の名は巳之助、母はちき、四人兄弟の三男坊で、地元のお蘇小学校に高等科を通じて八年間学んだ。最初の小学六年間は無欠席で通している。

学校ではやはり成績はいい方である。今なお元気な当時の同級生によると、席次は六十人中四、五番、体操は不活発で駄目だが、算数を得意としていた。高等科時代、よく奇抜な質問をして先生を困らせるので、先生も「あいつはわからん人間だ。今にごつい人間になるな」とみていたという。

山岸自身も小学生の頃を回想して、いつている。「社会については子供の頃から反逆で通した。おかしい思うたんですな。友達もなかつた。親たちはこの子のいうことは、わからんというし、友達もそういつていた。妥協というものになかつたんですな」

山岸の頭は考えを押しつめてきて、ある時点で達するとバツと直感がひらめいて飛躍するものらしい。本人にはいくら前後のつながりがあるが、その飛躍した箇所ものをいうものだから相手にはわからないということになる。そして思考が激しくなつて神経も鋭敏になると、次から次と新しい直

感が現われる。したがって考えも変る。そのうちに本人のいうこと自体、前後矛盾してくることになる。

その点をつくくと、山岸は、「うん、前はそういってたけど、今はこうや。考えがころころ、ころころと変わるんや」といっていた。

大体、『老子』を学んでか、真実というものは絶えず通常の常識を裏切るところにあり、逆説的なものであるとしていた。

先の同じ同級生によると、山岸会の運動が始まってからのことであるが、一度山岸は生れ村へ帰ってきたことがあるそうである。その時、他の級友の家に泊っているのので、「隣に親元があるのに何でここへ泊っていいんや」というと、山岸は「ここが家や」というのであった。親元というのは、親しく泊れるところが親元であって、次第によっては親元も親元ではないといたいのだろう。

そしてさらに奇妙なことに、「泊って何も礼いうことない。泊っているものに値打ちは何もない。留めたものに値打ちがある。旅費まで出してやるとしたら、そこまでしてもらわなくともいいわな。信義にそむくことやろ。素直に旅費はもらっとく……」とあって、結局自分の家には泊らずに帰ったという。

山岸巳代蔵の物の考え方は、万事こんなふうな具合である。それは恰も、老子が茶碗が真に有効なのは、器(実)ではなくて空閒(虚)であるとした論理に似ている。奇妙ではあっても真実をうがっている。真実が一見奇妙に聞こえるところで、一層真実の真実たる説得性が増す結果になっている。

こうした山岸が小学時代にあっても同じであつたろうことは、周囲の戸惑いを含めて十分想像できるのではなからうか。

山岸が生れた老蘇の実家には、今末弟の千代吉が住んでいる。実家といっても、山岸が生れたのは村中の本道沿いの方であつたが、千代吉一家は村端に移転して、そこで鶏肉業を営んでいる。

千代吉とは縁あつて二度会つたが、実に人当りの柔らかい、静かな物腰の人物である。声も密やかに洩れてくるといったふうで、会つてすぐに「ああ、これだな」と思った。傍らから奥さんが、巳代蔵は「やさしい方でしたなあ」というのであるが、そのやさしさが夫の千代吉の雰囲気から推して量られたのである。

兄弟は四人のうち、長男と次男はともに、三十五歳で早死している。「うちは一人おきでなあ、次男とわしが愚かもんでダメで、一番と三番がえらかつた。ことに一番上が一番かしこくて、そうら何させても負けなんだ」といわれる。

勉強ができたのはむろんのこと、運動会で走りあいしても一番で走るし、相撲をとつても次々に投げ飛ばす。長じては三味線、太鼓、謡を習つて巧みであり、花札、囲碁、将棋と征服せざるものなしというふうであつた。どんなことでも人に負けるのがいやな性分である。志望も荒っぽくて、大陸に渡つて馬賊になるつもりだといっていた。それがやがて朝鮮へ行つて、呉服や看板の商いをしているうちに、ぼっくりあの世へ逝つてしまった。

聞いていて、とすれば、三男の巳代蔵は頭腦的には長兄、性情的には四男に近似していると思つた。かしこいという点では、母親のちきが大変かしこい人であつたという。やはり血筋というものがあるのである。

あいにくと千代吉からは、巳代蔵の子供時代の話はあまり聞き出せなかつたが、他の人から一つの話聞いたことがある。

それは巳代蔵のまだ十三歳の時のことだそうであるが、ある日村の葬式を見に行つて桃を食べていた。食べ終つてその桃の実をポンと放つたのが、人に当たつた。ところが、当てられた当人は部落の人で、急に怒り出し、巳代蔵を追いかけてきた。巳代蔵は後にも先もわからないほどに懸命に逃げた。その後で親に、「桃の実を放つたくらいで何でこつなるんや」と尋ねてみても、一向にわからない。「それが社会に不審の念を持った始まりや」と本人自身そのように述べていたそうである。

この世に一人も救われざる人間のいない世を望む山岸であつてみれば、被差別部落の問題は大きな関心事の一つであり、その解決策も考えていたのであるが、その関心の発端はこんなところにあつたのである。

やがて高小を卒業した巳代蔵（十五歳）は、京都の今出川にある大橋商店という絹問屋に奉公に出た。これはどうした手づるがあつてのことか、千代吉に尋ねてみたが、別に何の縁もなく、学校の募集に応じたまでのことであつたらしい。

しかしこの処女体験としての社会に、山岸はたちまち嫌悪感を覚えた。なぜならこの老夫婦はお金の入つてくる度に口汚く罵り合い、喧嘩するのである。店員は店員で毎晩金を賭けて博打をし、夜もやかましくてろくろく寝られない。少年巳代蔵は、すっかり嫌気がさしてしまつた。そして（多分）問屋の二階から落ちて頭にケガをしたのをきつかけとして、店に別れを告げた。

桃の実が部落問題開眼の契機であつたとすれば、これは世の金銭なるものへの開眼の契機をなしたとせねばならない。

この後巳代蔵は流浪し、養鶏、百姓の道を辿り、商売の道は歩んでいないが（一時長浜の繊維商店で働いていたことはあつた）、ここで気づくことは、山岸における商いの意味の大きさである。いうまで

もなく生国滋賀県は江州商人の土地柄である。兄も友人もそうであるが、周囲は呉服そのほかを商い、百姓といえども銭もうけとなると眼の色が変わるとされる国である。

こうした土地に生れて山岸は、いやおうなしに商いの世界の空気をからだ中に吸い込んでいた。まして算数に長けた山岸であつてみれば、なおさらのことである。彼は内気で、無口ではあるが、決して商人に向いていない人間ではなかつた。むしろ反対で、商人として大もうけできた人物でもある。その証拠に自身大もうけできる機会のあつたことを述べているし、戦前には友人同士の会話で「もしお前が大臣になるとすれば、さしずめ商工大臣だなあ」といわれたことがあると周囲のものに洩らしている。

問題はそうした商業人間が、商いを嫌い、しかも商いの好きな連中相手に、金もうけ策を講じながら、金のいらぬ社会をつくらうとしたところにあるので、何ともいいようのない感銘とおかしさがそこにある。

2

大橋商店を辞して後の巳代蔵の行方は皆目わからない。千代吉に聞いても、頭のケガの治療に確か横浜に行ったはずだが、と聞いたにとどまる。山岸の履歴の中でこの数年間（大橋商店離職—大正十一年帰郷）が、一番空白の部分である。しかもこの不明な四、五年の時期こそ、彼の最も充実した、精神上のドラマに満ちた時代であつた。

生活的には彼は、定職を持つこともなく、各地を転々と流浪して歩いた模様である。ここのところ

にすでに彼の本領が発揮されているのであって、彼は本性的に一所に定着を好まない、移動型の人間であった。居所の移動は絶えず新鮮さと快適さを身につけていた当人の止みがたい願望であり、青春彷徨にあつては直ちに真実探求の旅でもあつた。

これは千代吉に聞いた話であるが、山岸は一種病的なまでに没頭癖を持っていた人のようである。つねに何か考えている。どういう機会に考えるというのではなく、平生日常の自己においてそのまま思考の姿勢になつているのである。「自転車に乗つとも、ありや道の石勘定しとるんやないかいといわれるほど、考え込んだつた」

そうした山岸であつてみれば、最多感な人生・社会への煩悶時代にはなおさらのことであつたらう、煩悶がむしろ彼をして、一所不住の身にしていたのである。

そしてこの真実探求の煩悶の旅の中で、彼は、まさに黄金体験ともいうべき機会にめぐまれ、生涯の思想の原型を得ている。天才的な思索においては、しばしばそうしたものである。北一輝や西田天香においても同じであるが、二十歳前後の若き日に、すでに後年の大思想の火種が得られているのである。山岸も後に人に話して、「私は若い頃から一度も心が変わっていません」といつている。

今、その黄金体験の過程と結果を、詳しく知ることができないのは真に残念なことであるが、彼自身が些少ながら語っている。それによると青年已代蔵は十八歳の折、新潟へ出向いていつて、ある日は、絶食状態のまま二十四時間考えぬいた。「大部分の人なら発狂するであろう。……哲学のもともを探究した」と。

著書の『山岸会養鶏法』には、「私は十九歳の時、或る壁にぶつかり、苦悩の内に一生かけての仕事を始めました。そして人生の理想について探究し、真理は一つであり、理想は方法によって実

現し得る」という信念を固めたとある。

発狂せんばかりに理想について考え、その結果「真理は一つである」と「方法によって実現し得る」の信念を得ることができた。なかならず山岸が強調したかったのは、「符号でもわかるごとく、方法的達成の問題であつた。方法といつても、ここで彼がいうのは、近代的意識としての知的方法である。理想は知的方法によって達成し得る、いや知的方法によって達成されない世界はないと考えた。もし知的方法によって達成しない場合があるとすれば、それは悲観したり絶望したりすることではなく、実行した具体的な方法がまずいのである。知的方法が悪いわけではない、具体方法を変えればいい。

かくのごとく知的方法に徹することによって、同時に彼は暴力革命を否定し、絶対平和と非暴力の道を採んだことになる。このことはかなり重要である。なぜなら世に平和と非暴力主義者はいないわけではない。しかし彼らは多く観念の輩であつて、現実の徒ではない。それに対して山岸は、端的に知的方法とすることで一挙に非暴力実行の内容を獲得している。そのことでまた自分の理想とする、自然愛和の社会の保証としたのである。

さらに山岸の語るところによれば、方法は方法が完成されたところで、恰も河川の橋梁のごとくであらねばならない。橋梁はどんな素人が歩いて、此岸から彼岸へ安全に渡してくれるものである。かくのごとく方法は、容易に、しかも百パーセントまちがいがなく使えるものであらねばならないとした。

つまり知的方法なるものは一見容易くみえて、そこまで追いつめたものでなければならぬ。山岸は「全人幸福愛和の誓」を作詞して、四番に「無理暴力を強さずに……」というが、暴力のみならず

無理も強くないのが完成された知的方法である。「自然愛和」の「自然」とは、無理強いしないから「自然」である。知的方法をそこまで厳密に考える必要がある。かくて山岸はいつでも実践に乗り出せる原理を得たわけであるが、彼はこの折角得た原理を行使するの迂回作戦をとって、養鶏から先に手をつけたのである。

このいきさつを知るためには、彼が置かれていた当時の環境から話す必要があるが、彼は京都を離れて後、左翼の仲間に加わっていた。当時流行の社会主義にかぶれていたのである。それが明瞭にみえるのは、新潟行の翌年（大正九）、徴兵検査（検査場近江八幡）においてであり、彼はその時、すでに徴兵忌避の姿勢にあった。

あまりの細さに検査官も驚くほどの痩身で、しかも主義者らしく伸び放題の長髪であった。徴兵検査ともなれば、久方振りに旧友に会って、気を許してか、「何でこんなところにこんならんのかわからんね」と洩らして、聞きとがめた検査官からきついお目玉をくらっている。

検査の結果は丙種か、第二乙種くらい。あっさり不合格で彼は東京（？）に出た。東京での巳代蔵は単に社会主義思想を持つのみならず、何ほどかに運動に従事していたのである。刑事に追いかけられ、再三拘引の憂き目にあっていた。その時偶然にも、養鶏に開眼したと次のように記している。

「私が養鶏に入った動機はふとした奇縁ともいふべきものがある。青年時代に人生及び当時の社会組織に疑問を抱き、その探究に没頭し、昼夜の別なく参考書を読み漁り心身を酷使し、かつ再三拘引留置等の圧迫のために健康を害し、やせ細った秋の一日、郊外に出て読もうと一書を携えて葛飾方面に行った時、又イヤな尾行が付き出し、犬を撒くためにある会社へ飛び込んだ。

そこが小穴氏の日本家畜産業会社で、種鶏舎に飼われていた白の純白レグの美しさと広い建物の中に整然と並べられた、サイプ一式孵卵器や電熱育雛器の中の可愛い雛に愛着を感じ、かつ私が把握した社会組織のあり方を鶏に應用実験すべく郷里に帰って（大正十一）養鶏に着手した」

千代吉の話によると、少年巳代蔵は京都の丁稚奉公時代から鶏が好きだったそうである。その時分から養鶏場へ行ってみたり、孵化を試みようとしたりしていた。それが後年、自分が置かれた特殊条件によって、ひとしお愛着を感じさせられたのである。

愛着を催すと同時に彼の頭の中で、自分の考えを鶏に應用することが閃いた。当時の状況からして、じかに人間社会に乗り出すことが難しい以上、人間社会の前に、まず鶏の社会で理想の王国をつくろうとした。このあたりが彼の天才的ともいえる着想である。しかもそれが苦心の末、完成したところで、彼は人間に應用する前に、すでに鶏の社会で実験を済ましていたことになる。

3

知性的方法においてなきざるはなし、ひいては絶対不可能と思われることを可能とするのが、知性的方法であるの自覚の下に、彼は一箇の証明をなしたことがある。

それは日本の各都市が空から襲われ、京都市もその予感におびえて主要通りの建物のとり壊しを行っている時分の話であるが、山岸はその壊さるべき家を安く買い求めて自分の地所に建てた。という何でもないように聞こえるが、何しろ当時は戦争の最中である。建築に要するセメントや木材、金具等、現物自体が殆どない。このような時にあって山岸はそれらの一切を手に入れ、しかも当時、住

宅建築は三十坪の厳しい制限があったのに、七十坪もの大きな家を建てることができた。

この怪事に関して、山岸は笑っていつている。

「別にぜいたくでやったわけではなく、戦争も先がみえていることだし、一つの実験としてやってみただけで、その頃東条首相でさえ三十坪の家二棟を建てて廊下でつないだといわれた時代に、こんな制限をはずれた大きなものを、しかも闇でも、非合法でもなく、立派に法規にしたがって建てたのが不思議だ、珍しいと、その筋の人までその方法をたずねがてらに見にきたものですよ」

まさに知的方法なるものの勝利であった。

こうして山岸は国に帰って恰もヴァレリイのテスト氏のごとく、方法意識に基づく鶏飼生活を始めるのであるが、何しろ素人のことである、当初は失敗に次ぐ失敗であった。

最初は人工孵化を試みたのであるが、当時は人工孵化の雛は機械子と呼ばれ、機械子は育たぬものとされてきた。それで折角孵化した雛も売るのが一苦勞で、前金など思いもよらない。ようやく奨めて雛を届けると、先方では、「それ雛がきたよ」と大騒ぎで決済は後回し。次に訪ねてみると雛は姿形もない有様で、金のことなんぞはいい出せない。まったく幼稚極まる商売をしていた。

そこで販売を中止してまず雛を育てるのが先決と、発生ごとに自分で育雛を試みた。しかしこれにしてもズブの素人、失敗ばかりつづく。年中連続育雛して、ある時は失火で育雛器もろとも焼失したり、ある時は目ずれで全滅に近くなったり、ループ・ジフテリア、鶏痘、ガス、食餌中毒、換気不良、食滞、日光不足等で、病氣も一通り経験した。この中において研究に研究を重ね、やがて自家孵卵は止めて若鶏養成に力を入れてから、次第に專業養鶏家に認められるようなものが出てきた。

この頃の兄について千代吉は「実に熱心なもんやったなあ、いつ寝ていつ起きるのか皆目見当のつ

かんことやった。わしが何時に起きても仕事しとった」といわれる。絶えず新しいやり方を考え、養鶏器材も自分で考えてこしらえている。その頃、老蘇辺にはまだ傘型育雛のやり方はなかったのに、自分で考案してランタン暖房や傘を作っていた。はるばる他村からも見にきたそうである。

一応養鶏に自信が出てきたところで、京都に進出した。(昭和六年、三十歳)

京都には上京区の寺ノ内千本の辺に、京都の養鶏界では名の知られた岡本という人があって、この人の世話になって鶏舎もその近くに移した。この岡本という人は京都の三高を中退した教養のある人格者で、恩を売るような人ではなく、山岸とは少なからずウマがあったということである。

しかし調子にのった養鶏も移転してすぐに鶏界大不況でゆきづまり、大整理して、下京区東九条にある閉鎖中の小さなたどん工場を借りて移った。以後、約二年間、雇人をやめさせて一人になり、それまでのすべての交友関係を断ち、自分の別の仕事も中止して、心身のありたけを養鶏に打ち込んだ。山岸はその頃を回想して「天職と趣味職業が一致し一事に没頭出来る人は能率も上り仕合せだと思えます」と記している。

ところが昭和九年九月二十一日の第一室戸台風にあつて、またまた鶏舎は大損害を受け、それを機会に下京区十条の三谷伸銅所の近くに移動した。ここは山岸の最後の養鶏場となったところである。

「それからは順風満帆で、一時は三方所の鶏舎に飼鶏一万羽を詰めたこともありませう。山岸は、その頃関東ではまだ殆ど手をつけていかなかった年一回孵化の名白を買い、上々の成績をあげていた。

こうなってくると苦難時代ほどの刺戟も進歩もなく、山岸の養鶏への興味は急に冷え込んできた。山岸は自分でも「私は飽き性や」といつていたが、一つのことが大体予想していたようにでき上がると、急速に熱が冷めてくる。次々と新しい未開拓の地平を求めて、船出したくなるのである。

養鶏に興味をなくしたところで彼は、京都養鶏組合の専務理事（初めは代行）になった。専務理事ともなれば、毎日出勤して、煩雑な事務を処理せねばならない。山岸にも、そうしたビジネスの生活があったのである。

特別のことなき毎日ではあったが、山岸にとってこの頃が一番安定した時期だったのであるまいか。帰郷して間もなく従妹に当る安土村中屋、山根志づ子と一緒になり、純（長男・画家）、映（長女）の二子を設けていた。ちよびひげに蝶ネクタイなんぞをしめて結構めかしこんでいたのも、この頃のことである。やがて時局の雲行きが悪くなり、世界を相手に戦争を始めた時分には、山岸は組合の専務理事をやめ、何故か飼料部の一係長を勤めていた。この飼料部時代（昭和十九年）のことであるが、平凡な生活の中にも一波瀾が起きた。

それは山岸が留置された事件であるが、今度は昔と違って思想問題ではない。食糧統制法違反の容疑である。その頃京都市の西郊に京都精麦会社という押麦をつくる工場があったが、山岸はこの社長、重役とじっこんになり、組合の養鶏家のために麦糖を配ってもらっていた。（この思いつき自体変っていた。みんな濃厚飼料でなければダメだと思っている時期に、彼は初期から粗飼料を巧みに使って卵を産ませていた）

しかしこの配給が怪しいと、警察に訴える人があった。何しろ鶏の餌と人間の食とが区別つかないような時代だったので、警察も乗り出さざるを得ず、出入り双方の責任者が呼び出されてブタ箱入りとなった次第である。

ブタ箱入りの際、いかにも山岸らしいのは、荷物検査があって山岸の包みを開けてみると、中から寝衣、タオル、歯みがき、紙などの日用品から書物などが出てきたので署員も驚いてしまった。むろ

ん、留置の間も悠々たるもので、まるでこの生活を楽しみ味わいきたようだったので、署長は、「私の警察生活三十年の間にこんな人を見るのは初めてでした」と山岸の知人に語っている。

この事件の結末は約一カ月後に京都の有力な飼料商によってもらい下げとなり、引きつづく裁判では無罪となったのであるが、山岸はこれを機会として二十年以上にわたる養鶏をすっかり止めることにした。山岸はこの時のことについて、「統制経済で面白味がなくなり、且つ当初の計画羽数延十萬羽をはるかに越えたので、廃業して年来の仕事に専念すべく現在の地に移住しました」と自著に書いている。

「現在の地」とは先に述べた七十坪の家を建てた伏見向島地内であり、「年来の仕事」とは、具体的には理想社会建設の書『月界への通路』を著作することであった。山岸は日本の各地に火の雨が降る中であって、「体からのちがきよならしたら止めるとして、悠々と綴っていた……」と記している。『月界への通路』は結局完成されたのか、されなかったのか不明である。執筆していたことは確かであるが、山岸の宅に入入りしていた某氏が門先の大きな蔵の二階まで上がって調べたのに、それらしきものは見当らなかったと書いている。

山岸の秘匿の仕方が余程うまかったのか、あるいは山岸会発足以後に発表された諸寄稿・発言（山岸会報第二号の「獣性より真の人間性へ」の冒頭に但し書きして「自著実践哲叢一・二八号のうちより」としてある）がその一端であったのか、今に至るもわからない。しかしいづれにしろ、山岸はこうした戦争下のどんづまりの生活の中で、悠々と「年来の仕事」に着手したのである。

そこには逆境にあつてなお、悠々と平常心を失わない達観した人の姿がある。茶道の心構えとして、「市中に山居す」などといういい方をするが、山岸の生は騒然たる市井にあつてなお静寂の山中に在るがごとくであつた。

多分この頃のことではないかと思うが、ある日、向島の義兄を訪ねた千代吉の奥さんは、山岸のあまりにもひどい恰好に驚いてしまった。髪は伸ばし放題、ひげはぼうぼう、上衣もズボンもところ構わず切れている。「どうしたんですか？」と尋ねると、当人は事もなげに、「山に入ったつもりでやっているんや……」と答えていたという。

いってしまえば山岸の生命を張ってまでの懸命さ、あるいは処世の態度、ひいては生きる上での精神境界とは、そうしたものだつたのである。もう一つ例をあげると、Z革命を目指して彼の許に糾合した一青年が、風呂場で命がけの革命を呼びかけている大先生に会つたので質問した。「先生、命がけというのはどういうことですか」。すると、当の先生、湯船につかりながら即座に答えて曰く、「うん、命がけとはなあ、汽車の席に腰かけているようなもんやなあ」

人の意表をついたような答え方であるが、山岸は釈迦なみに人を見て法を説く人であつた。しかも絶えず反語的、暗示的、間接的な物いをする人で、なかなか直接的には語らない。その方が、また当人に直接答えをいうより、譬えを通して考えさせる点でより効果的であると考へていた。

この場合にも、命がけをいうのに汽車の旅に譬えているが、その背景には彼の楽天性イデオロギズムが感じられる。「革命とは鉢巻しめてやるようなもんやない。もつと気楽に、自然な気持でやるもんだ」といいたいのだろう。

このように山岸は、ゆとりと余裕の人生を生きていた。その愛情と知性にみられるごとく、実に極

端な徹底主義者であり、また完全主義者であつたにも拘わらず、究極のところ、胸中に遊びと楽しみの世界があつたのである。そうした自分の生について、自身次のように書いている。

「人間の生活は一生を通じて、遊戯であり、私は自分から離して、例えば、芝居の登場人物を、客席から観る態度で、眺め、楽しんでいきますから、喜怒、哀楽、不遇、得意の感情に冷淡で、儲かつてもそれ程嬉しくないし、損しても他所事のようにです。

徴兵検査の時、厳めしく威張つて、上官だと思つている人の前でも、或いは子供の時に大人が目に見て、私に怒っている顔を見ておかしくなり、自分を忘れて、クスリと笑つて、一層ヒドク怒らした記憶があります。

養鶏も、農業も、本来の仕事の方も、凡て芝居であり、遊びであり、生きて居る間のなぐさみで、楽しい一つの踊りに過ぎないのです。養鶏を職業とした時代でも、もてあそ弄び的で、飼養法にしても、鶏種にしても、いろいろ建てては壊し、積んでは崩し、組み変えて試る癖が抜けなかつたのです」(『養鶏法』)

これが山岸の平均的意味での(ということとは、山岸にはまだまだ多面的な性格がある)「本性」であつた、と思われる。

「人間の生活は一生を通じて、遊戯であり」、人生は一場の芝居見物に過ぎない。

つまり、山岸の自己と現実は無媒介につながりながら同時に、常に一線を画して、何がしかの距離を保っている。決して現実べつたりにはならない。例え相手が青筋たてて怒っている時にも、相手の怒りの圈内にはおらず、観照的な態度でいる。いや、自分自身ですら生身の自分とそれを眺めている自身とがあり、生身の自己が絶えず現実に触れて変転するのを芝居を観るがごとく、楽しんで眺めて

いる。そうあることで彼の心はいつも平衡バランが得られ、いかなる境遇でも自己は救われていて、平常心を失うことがなかった。

そういうと、いかにも山岸は東洋的隠遁者のごとく聞こえるが、そこには再び山岸の逆転劇がある。裏ことばがある。というのは、確かに山岸は精神的境位とすれば東洋的な隠者の面影はあったであろう。しかしその東洋的隠棲の安心立命の境地を逆手にとつて、彼は理想社会建設の革命に乗り出しているのである。

それは恰も、ギリシャの快樂哲学の祖エピキュロスがその譚念において隠遁するのではなく、逆にアテナイの都にのぼり、その郊外において友愛の共同生活を営んだのに似ている。

こうした逆説的な生を説明するのに、「尚商立国」を称えて日本近代商業の父となつた福沢諭吉のことばを借りると、「人間の心掛けはとかく浮世を軽く視て、熱心に過ぎざるにあり、かく申せば、天下の人心を冷淡に導き、万事に力を尽す者なかるべきように思われるれども、決してしからず。浮世を軽く視るは、心の本体なり。軽く視るその浮世を渡るに活発なるは、心の動きなり。内心の底にこれを軽く視るがゆえに、よく決断してよく活発なるを得べし。棄てるは取るの法なりという。……浮世を棄てるは、すなわち浮世を活発に渡るの根本なりと知るべし」(『福翁自伝』)となる。

福沢は他でも心根を語っている。

「偶然この世に呼吸眠食し、喜怒哀楽の一夢中、たちまち消えてあどなきのみ。しかるにかの風俗の俗世界に、貴賤貧富榮枯盛衰などとて、夜々經營して心身を勞するその有様は、庭に塚築く蟻の群集がしゅう雨の襲い来るを知らざるのごとく……おかしくもまた浅ましき次第なれども、すでに世界に生まれ出たる上は、うじ虫ながらも相応の覚悟なきを得ず。すなわち覚悟とは何ぞや。人生本来戯れ

と知りながら、この一場の戯れを戯れとせずして、あたかも真面目に勤め、貧苦を去つて富榮を志し、同類の邪魔せずしてみずから安樂を求め、……生涯一点の過失なからんことに心掛けるこそうじ虫の本分なれ」(『福翁百話』)

福沢は事業を行うに常に(彼のことはでいえば)「極端の覚悟」でのぞんだ人である。慶応義塾大学を開いた時にも、「塾を開いたその時から、いつでもこの塾をつぶしてやろうと始終考えていたから少しも怖いものはなかった」と述懐している。そうした「極端の覚悟」を生んだ母体に、「浮世を軽くみる」と「人生本来戯れ」があった。

福沢のことばは一種東洋的な無常感の世界にみえて、彼は決してペシリストではない。むしろ生物学的存在としての人間をリアルにみつめて、逆に人間の同類が生息する社会のルールに徹した男である。方向あるいは目的の相違はあれ、殆ど同じ生き方をとつて、「真剣白刃」の人生、愛情の徹底と知性の完全に生きたのが山岸巳代蔵であった。